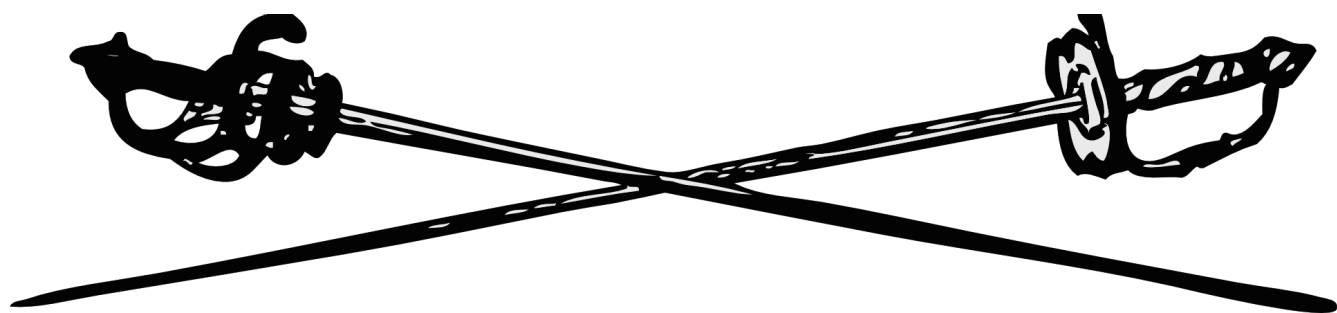


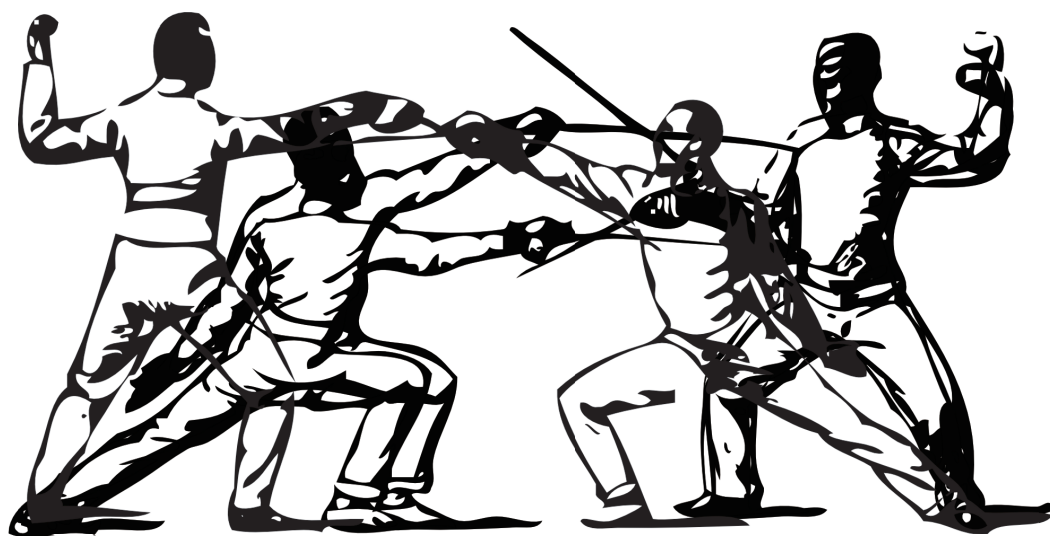
喫茶店



文

今月のお題
勝負

芸



2021年5月号

喫茶店文芸 2021年5月号——目次

山中 隆司

神様の箱庭 1

天野満

抜け猫たちの世界へ 7

ほろほろほろろ

心蝕虫 11

山中
隆司

神様の箱庭

かつて八百万の神様たちは、支配する領地を巡って争った。争いは名前を口にするのも憚られる高位の一組の神様が、これは民のためではなく己の利益のために争っていると発言したことにより争いは終結し神様ごとに任地が決められた。

私ことヒナタノカミヒメは辺境の氏神様に任命された。そのことに不満はない。自身も神様として力の弱いことは十分に理解している。

任地に赴くと土壌も悪く、毎年の農作物の収穫に苦勞していることがわかった。

祈年祭の奉り物として、新酒と新米があつた。お供えものは前年の収穫量によって内容が変わる。これまで数千年の経験から、前年が豊作のときは新酒、新米、あたりめ、乾燥アワビなどが献上されるが、不作のときは新米と新酒のみとなる。

ヒナタノカミヒメ様、今年こそ豊作をお頼みしますと白い袴を着けた老人が宣ずる。彼は私を祀る神社の村長だ。彼のことはよい男だと思っている。毎年、春と秋の祭りを欠かさずに行い、冠婚葬祭の際には仲人の役割を担っている。

これまで多くの村長を見てきた。私利私欲に走り村を困窮させた者。農地改善に熱心になるあまり内政をおろそかにして村を傾けた者。内政重視にした者と多数見てきた。今の村長ほど万事情よく行うものは見たことがない。彼の村人のことを第一に考えている姿は神として好意的に思っている。

神と人間が結ばれるのは神様界ではご法度だ。

目の前で必死に祈る男を不憫に思ったことはない。私が惹かれ

るものもあるが、この土地がおしまいなのを痛いほどに分かってい

るのも大きい。土壌はやせ細り、私の力だけではどうにもできない。こうなってしまうたら五穀豊穡の神や土の神に頼む必要がある。

私の神として役割は五穀豊穡ではなく、主に家内安全や安産祈願。その神に豊穡を祈るのはおかしい。

夜、私は依代としている翡翠の勾玉から顕現した。祭りの喧騒を見るのは楽しい。今、本殿は先日の祭りの日とは比べものにならないくらい静まりかえっている。参道に出てみて、周りに誰もいないことに胸を撫で下ろす。時々、こうやって外に出て人間界を楽しんでいる。神様なので人間や動物に気が付かれないように周囲への警戒は怠らない。

そろそろ年に一度の神様同士の会合で一年間の実施内容の報告がある。今年はあまり行きたくない。神様としてやるべきことをしていないわけではない。参拝をしてくれた人が願った些細な願いに對してはちよいと叶えてやったりもしている。去年の飢饉の影響で信仰している村人がほとんど亡くなってしまった。これでは神様としての格が下げられてしまふに違いない。今でも地方の氏神様という閑職についているが、左遷もありうる。次に左遷されるとすれば上位の神の付き人だ。そうなればもはや神様ではない。

暗がりの奥から人が歩く気配がする。近くの御神木の影に隠れる。

「この村もワシの世代でしまいじゃな。若いモンの多くは去年起こった飢饉で亡くなって残ったのは老い先短い老人と若い人男女が少し、これでは」

この言葉が耳にこべりついて離れない。

先日あった祭りのことを思い出す。

村を救ってほしいという言葉に対して「ごめんなさい」と謝ったとき、老人がこちらを振り返った気がした。姿は現していないはずなのに。

「ワシたちはこのままゆっくり死んでいけばいい。でも、若いモンは滅びゆく村ではないところで仲良く暮らしてほしい。だが、あたりの多く村も同じ具合なはず。一体、どうすればいいんじゃ」

「大丈夫。私がなんとかするから」

言ったもののどうにかできる自信はなかった。それに最近、届いた最高神からの会合の案内がきている。その回答も用意しないといけない。私にできることは参拝にきた人に一年の平穏をもたらすだけだ。

ため息をつく。私にできることはいろいろとやってきたつもりだ。

一般的に神様が人の願いを叶えるときの方法は大きく分けて二つある。一つは願った者の頭に触れる。それによって願いが叶うように力を導く。

もう一つはさら上位の神様に願いごとを叶えてもらうように取

り計らうのだ。この際は手土産を用意し、相手の都合を確認しなくてはいけない。上位の神様だと予約を取りつけるのも難しい。

一人でいると、いろいろと考えなくてよいことも考えてしまう。

私がここに来たのは間違いないのか。私はどうしてこんなに無力で、飢饉に役立たないのだろうか。

家内安全、安産祈願もたらず力じゃあ村は貧しくなるばかりだ。隣町の氏神様であるトヨフサウミヒメは豊かさをもたらす神様で毎年のような豊作をもたらし日々生活が豊かになっているらしい。

つい大きなため息が出てしまう。

「そこにいるのは誰だ」

「怪しいものじゃありません。どうか見逃してください」と立ち上がって、天衣についた砂を払う。目の前の男は青の着流しを着ている。旅人だろうか。

「君は……。どこかであったことがある気がするな」

「そんなことはないですよ。あなたと会うのは初めてです」

苦笑いするが内心は焦っていた。彼が村人ならば会ったことがある気がするは当たり前のことだ。村人全員参加の春と秋の祭の際に私を模した服を着た少女が奉納の舞を披露する。その時のことを言っているに違いない。目の前の男の顔をよく見る。面長で細い目としている。見覚えがあるが思い出せない。

「そうか。そうだよな。変なことを言ってすまない。それにしてもうら若い女性が一人で外を出歩くのは危ない。今日はこのあた

りの木賃宿で一緒に泊まろう。明日、一緒に帰って謝ってあげるよ」

私の神力を用いれば盗賊の一人や二人、ちょちょいのちょいとあの世に送ってやることなんて容易い。そんなことを言うとは怪しまれてしまうだろう。見た目は十歳にも満たない少女だ。この姿で出歩けばどのように扱われるかわかっている。首を縦にふって彼のあとに大人しくついていつてやる。もし、襲ってくるようであれば祟り殺してしまえばいい。私を祀る神社に続く参道を彼の後について歩く。

「君はあんな時間にどうして数十年前に廃村になった場所を歩いているんだい？」

「神社に参拝したあと急に眠くなったので、柱にもたれてうたた寝をしていてすっかり寝過ぎちゃって。夜だったけど親が心配しているだろうから、帰らないと行けないと思って」

「ここまで歩いたときに、村の中を通ってきたが廃村だったと思うが」

前を歩く男が笑っているのが後ろからでも分かる。私との会話を楽しんでいるだろうか。

「確かに廃村に見えるかもしれませんが、残った人たちは元気に暮らしています」

「それを聞いて安心したよ。俺もあそこの生まれなんだが、小さい時に離村したんだ。久しぶりにこのあたりに来たんだ。幼い頃に離村して、近くの大きな町に引っ越した。そこで魚を売って暮らしている。しかし、ヒドいな村が死んでる。俺たち一家が村を出たときは二百軒ぐらゐの家があつて栄えていたけど、今

じゃあ廃屋ばかりじゃないか」

「そうですね。去年あった飢饉のせいで多くの村人が亡くなりました。今では数名の老人と若い男女が残るばかりで……」

「そうか、そうだったのか」

私の記憶を振り返る。村を出た人も多くいる。顔の丸い少男や片目の潰れた女等々。数十年前、夜逃げした家族が最後である。あの家族には男と女に子供が五人いたはずである。

「ごめんなさい……。私が不甲斐ないばかりに」

つい謝ってしまう。私がこの土地が取り返しがつかないことになるまで他の神に頼んだりしなかったことが原因だとは思わないだろう。

「君が謝ることはない。飢饉と君の間には何も関係ないだろう。気にすることはない。運が悪かったと思うしかない。おやすみ」

横になっている男の顔を見る。かわいい。人間の寝顔をここまで愛おしいと思ったことはない。人間はあくまで箱庭の中に存在する駒のような存在としか、これまで考えてこなかった。毎年の報告も、どれだけ人間の願いを叶えたかを考えたことがなかった。特別な思いを抱くことはない。神様として抱いてはいけないのだ。筋の通った鼻に薄い唇。じつくりと彼の顔を見ると、三十年前のあのときに出ていった男に面影が似ていた。そつと彼の唇に触れようとしたとき、

「おい、その女。有り金を全部そこにおいていけ」

と脇差を私に向け近づく。夜盗か。この私も舐められたものだ。私が指をパチンと鳴らすと、夜盗は引き戸の段差につまずき、大きな音を立てて倒れこんだ。手に持った脇差を握りしめたまま受

け身を取ったため、頭に刺さる。

頭から血を流して倒れこんでいる男を見下してやる。

「運が悪いわね。つまずいてしまうなんて」と笑う。

「お客様、大丈夫ですか」

木賃宿の主人が慌て入ってきて、私を見る。

「お嬢さん。お怪我はありませんか」

「大丈夫です。怪我はないです」

木賃宿の主人はあたりを見渡して入口で血を流す男の存在に気が付き、そばに駆け寄る。返事がないのを確認し死んでいるのが分かる。主人は外に駆け出した。

それを確認し、私は床につく。

翌朝、天衣の袖をまくって、お米を研ぐ。釜の中に入れ、薪をくべる。私は家内安全や安産祈願など司る神として美味しいご飯を作るのが最も得意とすることだ

「おはよう。お米を炊いてくれてありがとう」

ふつふつとしているお釜を見て火を弱める。

「助けて頂いたお礼にお米を炊こうと思ひまして」

「そんなことをしなくてもいいのに」

「ご迷惑でしたか？」

「いや、ありがとう炊く手間がはぶけたよ」

男は私を見ていう。より正しくいえば私の着ている朝日に反射して光っている天衣を見て、

「あなたは一体？」

「私は、」

私が神であることを告白してもよいだろうか。告白したら今のままではいられないだろう。良くて配置換え、悪ければ神様ではない何かに変えられるだろう。

「わ、私はヒナタノカミヒメです。驚きましたか」

「驚いたよ。まさか、神様だなんて。これで納得がいく。あの村の神社の御神体なら見たことがある。初対面に感じなかったのは納得だよ」

突如、空が輝く。

——人間に自身の正体を明かしましたね。これは決まりに反します。——

目の前には二つの人影があった。

天野満
抜け猫たちの世界へ

快活な人生を送りたいと思って生きてきたのに、いつの間にやらカツカツな人生を送っていた。

学校では成績が良くなかつカツ、仕事でミスしてカツカツ、意中の人に振り向いてもらえなくてカツカツ、と硬質な音が生活の中に溢れかえっていたのである。

今もキッチンの戸棚からカツカツ音が聞こえるので、中を確認してみたら、空っぽになった米びつがカツカツ、と鳴っていた。米を入れてあげれば、米びつが重くなって静かになるのではないか。

俺は米を十キログラムも買ってきて、米びつを満たしてやった。すると、米びつの音は収まった。

しかし、今度は財布がカツカツ鳴りだした。米を買って金が無くなってしまったからだ。

来月の給金が入るまでの辛抱と、質素儉約に努めていたら、また米びつがカツカツ鳴り始めた。おかしい、まだ米は残っているはずなのに、と中身を見てみたら、わけのわからぬ虫が大量にわいて、カツカツ、と音を立てて米を食っていた。

人生はカツカツ鳴ってるのに、好物はトンカツなのに、俺は負けている。米を食われて負けている。

これまでの人生、俺は可能な限り勝負事を避けて生きてきた。

例えば、学生時代。部活なら体育会系の部活は避けて、コンテストとは縁の遠い部活を選んできた。社会人になってからも、仕事なら、同僚と営業成績を競うあのような雰囲気職場は避けて、仕事を探した。

勝負事を避けてきたのは、体育会系の部活や仕事など、大がかりで勝敗が重要な要素になってくるものに限らない。

レクリエーションや友人との遊びにおいても、優劣のつくような行為は可能な限り避けてきた。

なぜなら、本当に勝負事が苦手だからだ。

なんで、勝負事が苦手かといえば、勝っても負けても苦々しい思いが残るばかりであるからだ。

勝者の影にはいつも敗者がいる。自分が勝てば、相手に悔しい思いをさせてしまうし「相手は悔しくて悲しい思いをしてるんだろうな」と思ってしまい気持ちモヤモヤしてしまう。かといって、自分が負ければ、それはそれで悔しい気持ちになる。

それが勝負の世界で、その中でしかわからないこともある、とはわかってはいるし、一つの美のあり方だ、とは思っている。だがそれでも、俺は勝負事をできるだけ避けていたい。

そんな思いを抱えて生きているのだから、競争する必要性のない分野に興味を持つことになる。俺が音楽や文芸の世界に足を踏み入れることになったのは自然な流れであったのかもしれない。

ところが俺の思いをあざ笑うがごとく、世間は何かにつけて「勝ち組」「負け組」を決めたがる。俺はこの「勝ち組・負け組」という指標が大嫌いである。

収入、社会的地位、恋愛・結婚——。他人と競い合う必要のないもので、勝敗をつけたがる。

こともあろうに、芸術の分野においても本の売上冊数、コンサー

トの動員数など、格付け、競争、ランキングの概念が流入して来ているのである。あくまで経済的な指標においてのことだと、頭でわかっていても、本質から離れてしまっているような気がして釈然としない。

人間みな、生きていくだけで心が不安で不安でしょうがない。だから、自分が勝者あることを確認して安心したいのかもしれない。気持ちはわからんでもないが、どうにもモヤモヤした気持ちを抱えてしまう。そもそも勝負の土俵に上がった覚えもないのに、見知らぬ誰かに負けだの決められることには疑問しか出てこない。

不思議なことに、誰に言われるでもなく、自分で自分のことを負け犬です、と語っている人がいたりする。彼らは優しすぎたのだ。内なる社会性に屈服してしまったがために、自分で自分を敗北させてしまったのだろう。オイタワシヤ。

俺は勝ち組にも負け組にもなりたくない。

勝つでも負けるでもない、逃げるでも立ち向かうでもない、第三の選択は無いものだろうか。

第三の選択——該当しそうな言葉といえば何だろう。「抜ける」「脱する」「埒外」などの言葉だろうか。

土俵の上で戦うでもなく倒されるでもなく、土俵の上空に浮かび上がって、扇子を片手に舞を踊っているかのようなイメージ——。

勝ち組になるのも負け犬になるのも御免だ。でも、美人で優しいお姉さまの飼犬にはなりたいたい。もっというなら、犬より猫の

ほうが好きなので、飼猫になりたい。しかし、飼猫になったら、俺の「抜きたい」「脱したい」という気持ちはどうなるんだろう。舞を踊りたい気持ちは、文学の魂は、どうなるんだ。わからない。全ては混沌の中。泥っぽくて、ヘドロっぽい混沌。聞いたことのあるようなフレーズ。俺は、俺は、俺は。

そうか、俺は抜け猫になりたいのか。

抜け猫。なんだかすごく自由な響き。重力が軽くなったような気分。

世間が言う、勝った負けたの外側には、抜け猫たちの世界があるに違いない。その世界で大事なことは、勝ちや負けではない。己が信じる、己の道をただひたすらに進んでいくことが大事なのだ。誰かが勝ちも負けも決めない世界。いや、決めてくれない世界。俺はそこでニャー、と鳴いて、たくましく生きていきたい。すぐにそっちに行くから、待っててよね。

俺は勝ち負けだらけの世界を「了」の一字で締めくくり、虹の橋を渡った。

「この文学、めっさおもんじゃないじゃん！」

あ？お前、今なんつった？てか、誰やねんお前。

反米田蔑太郎（あんちこめだべつたろう）？なんちゅうハンドルネームしとんじやい。

俺のエッセーが面白くないやと？

じゃあ、蔑太郎よ。いつか名作エッセーを書いてやる。予告しとくぜ、その作品を読んだら、お前は死ぬ。なぜなら、面白すぎるからだ。お前は抱腹絶倒ののち、肺の中の酸素を完全に失う。ついでに腸も捻転する。よって死ぬるのだ。

いいか、蔑太郎、絶対に逃げるなよ。

これは俺とお前との真剣勝負なんだからな！

どうやら、俺は「文学の面白さ」というジャンルにおいて、途方も無く勝ち負けにこだわるらしい。

抜け猫たちの世界が、スゥー、と遠ざかっていく。

凡、凡、凡。どこからか聞こえる鐘の音が心に、じーんと響いて。(了)

心蝕虫
ほろほろほろろ

自宅のある古いアパートに虫が住み着くようになったのは、つい一週間前のことだったと思う。

初春の穏やかさも忘れるような仕事からの帰り道は、手を伸ばした先すら危ういほど深い闇に包まれていた。ぼつり、ぼつりと立つ街灯の頼りない灯が無ければ、自分がどこにいるかとおつに見失っていただろう。淡く照らされた夜道を足早に歩けば、自宅のアパートがやがて見えてくる。木製の三階建て。自宅は二階にあるので、外階段を上がらなければいけない。

ちかちかと点滅する灯に照らされ、狭く急な階段を上っていたときに、その存在に気が付いた。黒く斑に濁った壁に溶け込むようにして、一匹の虫が張り付いていたのだ。名前は知らないが大きな蚊のような虫で、ピクリともせず、ただじっと動かない。どこか不気味に思えたが、とはいえ所詮は虫であり、明日になればどこかへ飛んで消えるだろう。その時の私は特段気にすることもなく虫から一人分離れて階段を上がっていた。

明滅する光の下、何気なく階段を振り返る。虫は相変わらず動かない。早く消えてと心の中で呟いて、私はその場を後にした。

「さっさと終わらせろよ。お前の仕事が遅いせいで皆迷惑してるんだぞ」

「全然だめだ。やり直せ。こんなのが通ると本気で思ってるのか」「ほんとにお前は何もできないな。何のためにウチに入社したんだよ。さっさと辞めろ。邪魔だ」

この一月で、私はそれまでの人生分以上の非難を受けたと思う。私は新卒でとある「企業」に入社した。と言っても、その会社は心から願ったものではない。有り体に言えば、私は就職活動に失敗したのだ。

希望の度合いに差はあれど、周りの学友たちはおおよそ自分の希望通りの会社採用された。そんな中、私だけがこの有様だ。希望した会社からは全て落とされ、行く宛てのない私に手を差し伸べてくれたのは就活支援団体だった。しかし、時期的にもそこから紹介された企業は「あまり物」であり、募集要項は充実して書かれてはいるが、実態は簡単に想像がついた。だが、当時の私に選択肢は残されていなかった。知識もスキルも無い身でありながら紹介された企業全てにエントリーシートを送り、内定を貰ったこの会社に入社を決めた。

内定を貰った時は嬉しかった。自分に行き先ができたことを素直に喜んだ。だが今は、当時の感情の一片すらまともに思い出せない。

「おい！また同じミスしてるぞ。一体何度言ったら分かるんだ」

「はい、申し訳ありません」

「謝れば済む問題じゃないんだぞ。やり直せ、今すぐ」

「畏まりました」

入社してから一週間で私は実務を任された。研修など碌に受けていない。この会社は人員が全く足りておらず、従業員全員が眉間に皺を寄せてせわしなく作業している。文字通り右も左も分からぬ私でさえ駆り出される始末なのだ。そんな状態でまともに仕事などこなせるはずもない。私はミスを繰り返して、その度に上司

から怒号を頂いた。降り注ぐ叱責は私の糧になることもなく、ひたすら体を強張らせるばかりで、思考の柔軟性を奪っていった。私はただ縮こまったまま頭を下げ、嵐が過ぎるのを待つしかなかった。

業務が始まり日が経つほど、上司の怒鳴り声の頻度は増した。初めは私の仕事のミスに対して。その次は私の態度について。最後には私がそこにいただけで鬱陶しそうに扱った。上司の怒りのスイッチが一体どこにあるか検討が付かない。まるで地雷原を歩むように日々の業務に当たっていた。

「もういい。お前にやらせると永遠に終わらん。後は俺がやる、お前はもう何もするな」

「はい、申し訳ありません」

自身の精神が擦り切れる音が聞こえてくるようだ。ギリギリ、ギリギリと。やすりを掛けられるように胸が痛む。この状態が延々と続くことを思うと、痛みが更に増した。

「はい、申し訳、ありません。申し訳……」

闇に満たされた帰り道で、無意識に上司の言葉を脳内で繰り返している。意図したことではなかったが、しかしそれを自覚しても尚止めようとしなのは、そうすることが愚かな自分への罰のように思えたから。私は罰せられなければいけない。誰かがそう言って私を責め立てているような、そんな気がする。

「申し訳ありません。申し、訳、ありません——」

しかし、その思考はあるところでびしゃりと断たれる。それは自宅のアパートに差し掛かかり、狭い外階段を見上げた時だ。虫が留まっている。

壁一面を覆い尽くすように。

おびただしい虫の群れは気色の悪い長い足を壁に這わせ、細い羽をビクリともさせずにじっとしている。まるで何かを待つように、全体が同じ意思を持っているかのように、ただそこに居るだけだ。

虫は嫌い。大嫌い。何も考えていないように見えて、確実に私のことを監視している。奴らの行動の引き金は何なのかまるで見当つかない。足音か、そよ風か。息遣い一つでも間違えば一瞬にして襲い掛かってくるのではないか。そんな得体の知れないじつとりとした恐怖が背中を撫で上げる。

全身の毛が逆立つのを感じながら、私は鞆を持つ手に力を入れる。

初めは一匹だけだった。一晩経てばすぐに消えると思っていた。だが、私の願望とは裏腹に虫の数は日を追うごとに増えていった。今では階段の壁だけでは場所が足らず、玄関前の通路にまで虫の群れが押し寄せている。

私は鞆の中に手を差し込みつつ、息を止めて階段を上がる。虫たちと向かい合い、手すりに背中を擦らせながら一歩ずつ上っていく。そして玄関前に辿り着き、自宅に入った瞬間に鍵を全て閉めた。

扉を背にしながら、大きく息を吐くと共に力無く崩れ落ちる。この部屋の中なら安全だ。もう気を張る必要はない。

靴から手を引き抜くと、殺虫スプレーを握っていた。あの虫たちがいつ襲ってきても対処できるように、常に一本は持ち歩くようにしている。家の靴箱の上にも、大量の予備が準備してある。

大丈夫、大丈夫。

まだ鼓動が落ち着かない自分を宥めつつ、よろめきながら立ち上がる。明日も早い。今日はもう、寝よう。

細く短い廊下を歩く。ふと何気なく背後の扉へ振り返る。

虫の声は聞こえない。

毎朝、玄関の扉を開ける手がずしりと重い。出社して上司と顔を合わせることが辛いというだけではない。重みを感じる要因の半分は例の虫だ。奴らは恐らくこれからも数を増やしていく。理屈は知らないが、昼夜を問わずこのアパートに住み着き、私の心を不安定にさせる。この状況はどう考えても異常だった。

ただそこに張り付いているだけならまだ良い。この扉を開いたとき、万が一にも虫がこの部屋に入ってきたらと思うと、ドアノブを握る手が強張る。そんな時には靴の中に手を入れる。硬く冷たい確かな感触がある。ただの市販の殺虫スプレーだが、今の私には銃にも勝る安心感を与えてくれる。

そうして私は一呼吸置き、意を決してドアノブを回すのだ。

そこからの展開はあつという間の出来事だ。動かない虫の傍を通り抜け、出社した後は普段通り怒鳴られる。その繰り返しが私の日常。ただ、今日だけはほんの少しだけ違った。

私は初めて社内のにじめに遭ったと思う。女性の先輩社員グループの仕業だった。内容は単純で、私がお手洗いに席を立った隙を突いて荷物を漁られたのだ。

靴の中身を見られた程度なら、普通の人にとっては大して問題ではないかもしれない。しかし私の靴には普通とは言い難い物が入っていた。当然彼女らがそれを見逃すはずもない。

「うわ、あいつ殺虫スプレー持ち歩いてる」

「訳わからん。何で会社に持って来てんの」

「げえ、気持ち悪う」

彼女らは好き勝手言った挙句私からスプレーを取り上げた。幾ら返してとせがんでも聞き入れられることは無かった。そうする内に普段から私を怒鳴る上司が現れ、会社にこんな物を持ち込むとは何を考えて居るのかと、険しい顔で私を黙らせた。そのままスプレーは上司によって持ち出され、私の手元に戻ってくることは無かった。

その日の帰り道、私は肩を震わせながら歩道を歩いていた。怖い、怖くて堪らない。暗闇や不審者ではなく、あの虫共が何よりも恐ろしいのだ。今の私は丸腰で、もしも一斉に襲われたなら成す術もない。

もしやあの虫共は、このタイミングを狙っていたのではないだろうか。じっと動かず敵意のないように見せかけておき、私が無抵抗となる日を今か今かと待ち望んでいたのではないだろうか。であれば今日、私はどうすればいい？どうすればあの道を通り抜けられる？

やがて自宅のアパートが見えてくる。外階段の壁は黒く濁った

木製のはずなのに、今や無数の羽に覆われている。そこに手を触れる想像をして、背筋がぐにやりと曲がる思いだった。

鼓動が早い。呼吸も浅い。視界が歪む。足が重い。手先が痺れる。口が乾く。

奴らの傍を通り抜けなければ、決して部屋に辿り着くことはできない。

鈍い足を前へ押し出す。踏み出す度に途方の無い時間を掛け、一歩ずつ、体中の関節を軋ませながら前へ進む。

眼前に虫の群れが迫る。私の存在に気付かないでと切に祈る。吐き気を催しながらも手を口に当てることはできず、必死に唾を飲み込んだ。

気付かないでください。どうかお願いします。見逃してください。

頼りない呪文を唱えながら階段を上る。一段ずつ、ゆっくり、ゆっくり。

中盤まで上りきる。前方も後方も、虫が全てを覆い尽くしている。最早後戻りはできない。静謐な闇夜の中、自分の心臓の音だけが激しく響いている。その音があまりにもうるさく、聞こえないでと必死に祈りながら階段の終盤に差し掛かる。そして。

私のつま先が、何かを蹴飛ばした。

カラン、コロンと音を立て、それは階段の隙間から落ちていく。

瞬間、それを合図と言わんばかりに、虫たちが一斉に私を凝視した。

心臓がぎゅつと握り締められる。

「ご、ごめんなさいッ！」

私は両腕で頭を庇いながら勢いよく階段を駆け上がった。それと同時に虫たちは一斉に羽ばたき始める。一心不乱に足を動かすが、背後から聞こえる無数の羽音が次第に距離を詰めてくる。まるでそれは大きな腕のようで、私の体に掴みかかろうと大きく手を開いた。

「ごめんなさい！許してください！申し訳ありません！」

私の叫びに一切反応することなく虫は襲い掛かる。その指先がいよいよ私の首筋に触れようかというとき、私は自室の扉を開いた。

「あ、ああ……あ」

全ての鍵を閉めた私は、糸が切れたように座り込む。今でも扉の外ではやかましい羽音が鳴り響いていた。

「逃げた。逃げ切った。もう大丈夫、だいじょうぶ」

自分に何度も言い聞かせ、やがて呼吸が落ち着いてくる。所詮あいつらは虫の体。鉄の扉を隔てた今、あいつらの脅威に怯える必要はない。安心して、大丈夫、もう怖いことは起きないから。

次第次第に羽音が弱くなっていく。虫共は諦め、散り始めたのだろう。良かった。これで本当に脅威は去った。もう、本当に大丈夫。

息をつき、胸を撫で下ろした私はよろよろと立ち上がり、震えの落ち着いた腕を持ち上げて電気スイッチを入れた。

白いはずの部屋の壁一面が、黒い何かで覆われている。

もぞもぞと蠢くそれは、大きな羽虫の群れ。

「――あ」

うるさく羽音を立て、一匹、また一匹と壁から飛び立つ。

「あああ、あ、あああ」

やがてそれらは一つの生命体のように唸り、私の視界を埋め尽くした。

「あああッ！あああああああ！！」

自分が何者かすら忘れるほど叫び、狂い、暴れている。必死に
もがいて、何かを振り回して、それを繰り返す度に意識が手元か
ら離れていく。体の感覚は無くなり、考えることが出来なくなり。
やがて視界はテレビの電源を切ったようにプツンと暗転した。

目を覚ますと、私は自宅ではない部屋のベッドに寝かされてい
た。ぼやけた視界の中で見渡すと、白い床、白い壁、白い天井に
囲われている。ここが病院だと気付くまでそう長い時間はかから
なかった。

「気付きましたか？」

声を掛けてきたのは、私と年の近そうな女性の看護師だった。
彼女は柔らかな笑顔を作り、落ち着いた声色で宥めるように言う。

「大丈夫ですよ。安心してください。ここは安全ですから。あな
たを怖い目に遭わせる人なんていません」

怖いもの。……そうだ、あの日の夜、私は自宅で無数の虫に襲
われて。

もう、虫はいない。まるで全てが幻だったかのように目の前か
ら全て消え失せた。本当にそうなのかと、胸の中で誰かが問う。

「アパートの外で、大量の、数えきれないほどの虫に襲われたん
です。逃げ切ったと思ったら家の中にも山ほどいて、そいつらに
襲われたんです。あ、あの虫たちは本当にいなくなっただんです
か？」

「ええ、本当です。この病院の設備は最新ですから、どんな小さ
い虫でも入らせません。安心してください」

「ほんとうに、もう襲われらない。ここなら大丈夫なんです」
「そうです。大丈夫です。うん、大分落ち着いてきましたね」

看護師さんは立ち上がり、先生を呼びに行くといい残して部屋
を後にした。

安心したせいか、焦りで火照った体が熱い。病衣の袖を捲って
みれば、じっとりした汗が痣だらけの肌の上に浮いていた。

痣。傷はそれしか残っていない。虫に刺されたり、咬まれたよ
うな傷は見当たらない。きつとここで気を失っている間に治った
のだろう。ほっと息をつき、静かな病室を見渡してみる。

独りぼっちになった個室に、微かな風が吹いている。空調から
の風だろう。ほんのり汗ばんだ頬が熱を奪われて心地良い。ふと

横を見ると水の入ったコップが机の上に置かれていた。わざわざ用意してくれたのか。心の中で感謝の言葉を述べるとともに手を伸ばす。そしてコップを手の平で握ったとき、ふと気が付いた。

私の手の甲に、それを覆うように大きな羽虫が留まっている。

(了)

